The Japanese Society for Aesthetics

美學. 第53卷1号(209号) 2002年6月30日刊行.

ー はじめに	Grundsatz)が彼の注意を惹かずにはいなかった。これは、世
	界全体の完全性という抽象的観念を実現するために、手段の選
本稿はフリードリヒ・シラー(一七五九―一八〇五)の思想	択についてはあまり躊躇しなかったのである」(NA20 284f.)。
の展開過程を、社会統合という問題に即して解明する言。その	ここでシラーは、自分の同時代の主要な倫理思想として「唯物
際分析の対象となるテクストは、彼の、初期から「人間の美的	論」と(共和主義と密接に関わる)「完全性の原理」に言及し
教育についての一連の書簡」("Ueber die ästhetische Erziehung	ている。シラーは、以上二つの思想およびカントの倫理学と取
des Menschen in einer Reihe von Briefen" 1795 以下「美的教育	り組むことで彼独自の社会思想を形成していった。最初期のシ
書簡」と略す)に至る理論的・批評的著作である。	ラーは「愛」の思想を通じて「唯物論」との対決を試みた(本
シラーの思想を社会統合という観点から見る場合、以下に引	稿第二節)。その後彼は共和主義思想について批判的に考察し
用する「優美と尊厳について」("Ueber Anmuth und Würde"	(第三節)、そこで生じた問いへの回答として近代の「民衆詩人」
1793)からの一節が導きの糸となるだろう。「カントが自分の	を構想した(第四節)。さらにその後シラーはカントの批判哲
時代の道徳を、体系という観点と実践という観点において見た	学の枠組みを受け入れ、その内部で、道徳性を美的なものによ
とき、まず彼は、一方で道徳的諸原理における粗野な唯物論	って代行し補助することの可能性を探求した。この探求の到達
(Materialismus)に憤慨せずにはいられなかった。[…] 他方	点にあるのが「美的国家」論である(第五節)。
では、それに劣らず憂慮すべき完全性の原理(Perfektions-	

シラーの思想における社会統合の問 「美的国家」とその前史 題

田

中

均

-15-

ニ 「哲学書簡」における「愛」
本節では初期シラーの思想を代表する著作として「哲学書簡」
("Philosophische Briefe" 1786)という書簡体小説を取りあげ、
その主人公ユリウスの論文「ユリウスの神智学」(Theosophie
des Julius 以下「神智学」と略す)で展開される「愛」(Liebe)
の思想を検討する。
まず「神智学」についてユリウス自身が述べている一節を引
用しよう。「私は精神の法則を探求し無限へと舞い上がってい
ます。しかし私はそれらの法則の実在を証明することを忘れて
います。唯物論の果敢な攻撃が私の創造物を倒壊させます」
(NA20 115)。この引用によれば、ユリウスが「神智学」にお
いて探求した「精神の法則」は、それが実在するという証明を
欠いているがゆえに「唯物論」の攻撃に耐え得るものではなか
った。ではこの「精神の法則」とはいかなるものか、そしてこ
れに対する「唯物論」の攻撃とはいかなるものかを以下に見て
いこう。
「神智学」では精神の働きについて以下のテーゼが立てられ
ている。「美しいもの・真なるもの・卓越したものを直観する
ことは、これらの性質を瞬間的に所有すること(augenblik-
liche Besiznehmung) である」(NA20 117)。このテーゼに従
えば、直観という行為は「我々によって知覚される状態に我々

-16-

すなわち、精神が直観の対象に瞬間的に同一化するならば他者	S _o	身体の働きと連動するものとして捉えられていることが分か	依拠する対立的なものとして捉えられておらず、精神の働きは	られる同一化においては精神と身体とがそれぞれ別個の原理に	(NA20 117)と述べており、このことから、「神智学」で論じ	わせ、我々の魂がこの状態に移行したことを明らかにする」	の 瞬間 (Augenblik) に は 行為する 人間の 振る舞いに 調子を 合	物語を聞くときの人間の反応について、「我々の身体自体がこ	またユリウスは、「寛大な、勇敢な、機敏な行為」についての	はなく、反省に媒介されない、精神の無自覚的な変容である。	化は、精神の意識的な活動や訓練の結果として達成されるので	ることから理解されるように、直観による精神と対象との同一	た客体になる」。ここで「瞬間的」という表現が用いられてい	自身が入る」ことを可能にする。ゆえに「我々自身が知覚され
		3°	平	る。 身体の働きと連動するものとして捉えられていることが分か依拠する対立的なものとして捉えられておらず、精神の働きは	る。 る。 る。 る。 の た して 捉えられて おらず、 精神の 働きは られる同一化においては 精神と身体とがそれぞれ別個の原理に	る。 (NA20 117) と述べており、このことから、「神智学」で論じ る。	る。 る。 る。 の し の の の の の の の た の た た の の の の の た し て 捉 え られておらず、精神の 働きは られる同一化においては精神と身体とがそれぞれ別個の原理に られる同一化においては精神と身体とがそれぞれ別個の原理に の れる同一化においては精神と身体とがそれぞれ別個の原理に の し で し の として捉えられておらず、精神の 働きは の し の し の として捉えられておらず、 た の の の の の の の の の の の の の の の の の の	る。 る。 る。 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 る。	る。 る。 る。	る。 る。 る。 の 院 町 の し た に お い た お い た に お い て お り 、 こ の こ と か ら れ る に お い て お り 、 こ の こ と か ら 、 「 神 智 学」で 論 じ の 院 間 (Augenblik) に は 行 為 す る 人 間 の 振 る 舞 い に 調 い て お り 、 こ の こ と か ら 、 「 神 智 学」で 論 じ の 開 の 原 理 に い て お り 、 こ の こ と か ら 、 「 神 智 学」で 論 じ の 開 の 原 理 に い て お り 、 こ の こ と か ら 、 「 神 智 学」で 論 う の に お い て お り 、 こ の た こ と か ら 、 「 神 智 学」で 令 う の に ま う の こ の 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	る。 はなく、反省に媒介されない、精神の無自覚的な変容である。 る。	る。 化は、精神の意識的な活動や訓練の結果として達成されるので る。	ることから理解されるように、直観による精神と対象との同一 ることから理解されるように、直観による精神と対象との同一 ることから理解されるように、直観による精神と対象との同一 る。	る。 る。 ここで「瞬間的」という表現が用いられてい る。 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 の瞬間(Augenblik)には行為する人間の振る舞いに調子を合 る。

その本性上他者の幸福を望む、という推論である。ユリウスは 他者の幸福を望むことを「好意」(Wohlwollen: NA20 119)な の幸福は直観を通じて自己の幸福になるのであるから、 枢に植え付ける。愛は統一へ向かうが、エゴイズムは孤独であ 自身の内に据えるが、愛は中心点を自分の外、 せつつ以下のように述べる。「エゴイズムはその中心点を自分 いし「愛」と呼び⁽²⁾、「愛」について「エゴイズム」と対比さ 永遠の全体の中 精神は

ある、と言える 🐃 先に触れたように、「神智学」において精
「愛」の思想が現実性を欠くものであることを暴露することで
束縛された利己的存在であることを指摘することによって、
物論」の攻撃とは、人間が機械的身体を持ち「卑小な欲求」に
このユリウスの発言を踏まえると、「神智学」に対する「唯
「エゴイズム」によって阻まれる。
体化することができない。言うなれば、精神の「愛」は身体の
小な欲求」に束縛されているがゆえに、現実には他の精神と一
ユリウスによれば、精神は「硬直」した機械的身体とその「卑
と混ぜ合わされ、卑小な運命に束縛されています」(NA20 112)。
の硬直して変化不能の時計仕掛けに編み込まれて、卑小な欲求
幸な矛盾です――この自由で高みを目指す精神は死すべき身体
思想について以下のように述べている。「しかし――自然の不
したのだろうか。「神智学」を書いた後のユリウスは「愛」の
では「愛」の思想は「唯物論」のいかなる攻撃によって倒壊
個人相互の「愛」と連続的に捉えられている。
類全体の統一は、個人相互の「愛」が拡張した結果とみなされ、
に矛盾する可能性は考慮されていない。「神智学」において人
おいては、個人相互の関係と、個人と人類全体との関係が相互
のことが明らかになる。すなわち「神智学」の「愛」の思想に
全体へ統合する原理であるとされている。このことからは以下
観を介して個人相互の同一化を果たすだけでなく、個人を人類
る」(NA20 123)。この引用から理解されるように、「愛」は直

三 「ドン・カルロスについての書簡」における「 共和主義的徳 」	ユリウス自身によって放棄される。	統合されるという「神智学」の構想は、「哲学書簡」の内部で	びつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へと
ーザ侯の行動原理を「情熱的友情」として理解している。しかの「「「「「」」」である(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポロのポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラーは「愛」の思想に代では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	ユリウス自身によって放棄される。 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 に統了では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするた りのn Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロス』についての書 簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書 自身がポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー よ自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』についての作 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての 指身がポーザ侯と自己の間に思想的な親近性を認めているから である(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポ いつの たってたる。 本節でこの批評を取りあげる である(DK3 427)。 シラーによると、批評家たちは一般にポ	ーザ侯の行動原理を「情熱的友情」として理解している。しか だある(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポ である(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポ である(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポ である(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポ
である(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかに本節では「ドン・カルロスについての書簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる人では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	この思想には、この思想には、シラーによると、批評家たちは一般にポでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代では「哲学書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげると、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作前して発表されたシラーの「ない」のである。本節でこの批評家たちは一般にポートでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代表しているから」のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登した。	ユリウス自身によって放棄される。 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 に発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』における「共和主義的徳 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書 簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作 場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー 場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー など自己の間に思想的な親近性を認めているから である(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポ	である(DK3 427)。シラーによると、批評家たちは一般にポ たちは、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』における「共和主義的徳」 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての 育身がポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての (Briefe über Don Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロス』についての (Briefe über Don Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロス』についての して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての (Briefe über Don Karlos" 1788)を分析する。本節でこの批評を取りあげる して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』における主要登 のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登 のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登
自身がポーザ侯と自己の間に思想的な親近性を認めているから りのn Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロス』における主要登 のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登 れたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての にて発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての にて発表されたシラーの して発表されたシラーの して発表されたシラーの して 発表されたシラーの して についての に と についての に と に ついての に と に ついての に し て の は 、 こ の 批評 の 主題 が ら 明 ら か な よ う に 、 ー 七 八 七 年 に 単 行本と (Marquis Posa) の 行 動 原理で あり、 シラー は の い て の に ついての 作	三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	ユリウス自身によって放棄される。 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ないかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするた がに本節では「ドン・カルロスについての書簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』における主要登 もして発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』にわける主要登 のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登 のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登	ユリウス自身によって放棄される。 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 この批評の主題が、『ドン・カルロス』における「共和主義的徳」 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書 簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書 な前のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー 身がポーザ侯と自己の間に思想的な親近性を認めているから
場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラーのは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登的に本節では「ドン・カルロスについての書簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と首自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげるでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラービン・カルロスについての書簡」における主要登的に本節では「ドン・カルロスについての書簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と前」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と前」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と前して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書簡」における「共和主義的徳」三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』における「共和主義的徳」 では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 やるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするた りon Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロス』についての書 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての 自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる 者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる 者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる では、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登	場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー 場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー 場人物のポーザ侯(Marquis Posa)の行動原理であり、シラー
のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにする、「ドン・カルロス」についての作簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本ともるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたった。では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』についての作物に本節では「ドン・カルロスについての書簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と前」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本として発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書簡」における「共和主義的徳」	ユリウス自身によって放棄される。 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 たがでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするた めに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe über わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするた して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作 さりました。 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作 して発表されたシラーの載曲『ドン・カルロス』における主要登	スリウス自身によって放棄される。 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書 簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての 書自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる のは、この批評の主題が、『ドン・カルロス』における主要登
者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげるして発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と的に本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überかるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげるして発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作物に本節では「ドン・カルロスについての書簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と前」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本として発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての書簡」における「共和主義的徳」	キーティング この 「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」	者自身による書簡体批評である。本節でこの批評を取りあげる ユリウス自身によって放棄される。 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ごに、「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするために本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe über わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするために本節では「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」
して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本とめに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überかるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本とめに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe über かるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするために本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe über では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代言。「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	ユリウス自身によって放棄される。 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ニ「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作 して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作	して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作続合されるという「神智学」の構想は、「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代の「「「おいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするために本節では「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」して発表されたシラーの戯曲『ドン・カルロス』についての作
簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本とDon Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロスについての書めに本節では「ドン・カルロスについてのさついての書簡」("Briefe überでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本とわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするために本節では「ドン・カルロスについての書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本とでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするために本節では「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 こ「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe über のの Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロスについての書 しのn Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロスについての書 の思想に代 の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	簡」は、その表題から明らかなように、一七八七年に単行本と ユリウス自身によって放棄される。 三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするた わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするた のに本節では「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 がらされるという「神智学」の構想は、「哲学書簡」の内部で
Don Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロスについての書めに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	Don Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロスについての書めに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたては「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代三 「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	ユリウス自身によって放棄される。「ドン・カルロスについての書の「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überかるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにする。	Don Karlos" 1788)を分析する。「ドン・カルロスについての書のに本節では「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」に、して、「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 がっかっては「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 ひの Karlos" 1788)を分析する。
めに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	めに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	めに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたわるいかなる構想を立てたのであり、シラーは「愛」の思想に代わるいかなる構想を立てたのでの書簡」における「共和主義的徳」ユリウス自身によって放棄される。	めに本節では「ドン・カルロスについての書簡」("Briefe überでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたわるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたたるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするためるいかなる構想を立てたの構想は、「哲学書簡」の内部で
わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするたでは「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代 こ 「 ドン・カルロスについての書簡」における「 共和主義的徳 」 ユリウス自身によって放棄される。	わるいかなる構想を立てたのだろうか。これを明らかにするた ユリウス自身によって放棄される。 三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」 が合されるという「神智学」の構想は、「哲学書簡」の内部で
では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代	では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」	では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」ユリウス自身によって放棄される。	では「哲学書簡」に続く時期に、シラーは「愛」の思想に代ユリウス自身によって放棄される。
		三「ドン・カルロスについての書簡」における「共和主義的徳」ユリウス自身によって放棄される。	
		びつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へと	
	統合されるという「神智学」の構想は、「哲学書簡」の内部でびつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へとそのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結	びつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へとそのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結	そのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結
ユリウス自身によって放棄される。 統合されるという「神智学」の構想は、「哲学書簡」の内部でびつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へとそのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結ないような人間の身体的存在が看過されていることでもある。	統合されるという「神智学」の構想は、「哲学書簡」の内部でびつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へとそのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結ないような人間の身体的存在が看過されていることでもある。	びつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へとそのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結ないような人間の身体的存在が看過されていることでもある。	そのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結ないような人間の身体的存在が看過されていることでもある。
ユリウス自身によって放棄される。 ないような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結そのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結そのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結えいような人間の身体的存在が看過されていることでもある。えられているが、これは言い換えれば、精神の原理に回収され	統合されるという「神智学」の構想は、「哲学書簡」の内部でびつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へとそのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結ないような人間の身体的存在が看過されていることでもある。えられているが、これは言い換えれば、精神の原理に回収され	びつき、この結合が拡張することによって個人が人類全体へとそのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結ないような人間の身体的存在が看過されていることでもある。えられているが、これは言い換えれば、精神の原理に回収され	そのような難点を持つがゆえに、「愛」によって個人相互が結ないような人間の身体的存在が看過されていることでもある。えられているが、これは言い換えれば、精神の原理に回収され

-17-

以上の 的な目的だけが引き起こすことのできる、危険を顧みない大胆の作品の経過においてポーザ侯が企てるすべての措置は、英雄 係のうちに閉塞し、 にし、すべてを一人の相手において楽しむ性向の痕跡がほんの さを示しています。それに対して、友情とはしばしば弱気にな 少ないかということをシラーは以下のように述べている。「こ ある。ポーザ侯のこのような行動がいかに友情に基づくことが 知らせないままに彼を逮捕拘禁した上で密かにフランドルに送 ザ侯は、 このことは、 うか」(DK3 441)。シラーはこの箇所で、友愛を個人相互の関 心が人類への 的友情の本来の性格があるのです。侯にあっては、王子への関 少しでもあるでしょうか。しかしこのような性向にのみ、 な、すべてを度外視し、 護することの痕跡がほんの少しでもあるでしょうか。このよう るものであり、そして常に気遣いをするものです。これまで侯 るという、友人に対して暴力的でありかつ秘密主義的な方法で の際ポーザ侯がとる方法とは、カルロスには計画について何も カルロスを彼の地に送って反乱軍と協力させようとするが、そ て取れる。スペインに対するフランドルの反乱を支持するポー の性格において、一人の孤立した人間をこのように心配して保 相違点の他にも、友愛の性格づけにおける相違点もある。 スペイン王子であり父王フィリップに批判的なドン・ |関心に従属していないところがどこかあるでしょ 友人ドン・カルロスに対するポーザ侯の態度に見 個人と人類全体との関係とは無関係なもの すべてをただ一人の相手のために犠牲 情熱

-18-

の愛」はいかなる個別の他者をも軽視する。	あって実在する個人ではないために、「美しく行為することへ	忠誠心」に従って行為する。この場合、愛の対象は「	「徳の表象、そして生み出されるべき幸福の表象への熱	とへの愛」とを比較する (DK3 463)。後者の場合	まずシラーは、「現実の相手への愛」と「美しく行為する	ように二種類の説明を試みている。	誘発してしまうのだろうか。これについてシラーは	指す「共和主義的徳」は、なぜ他者への暴力と他者	の縁にまで連れていく」(DK3 462)と。人類	も知らせず誘導し、そしてまさにそのことによって友人を没	いる」し、「ポーザ侯は自分の友人を	もかかわらず、自分の友人には専制的な恣意さえも	れほど高邁な考えを持っており、いつもそれを鼓吹してい	以下のように非難した。すなわち「ポーザ侯は自由	が見られる。そのため、シラーによれば多くの人がポーザ侯を	のみならず他の個人をも犠牲にすることを厭わない「大胆さ」	おいてみたように、「共和主義的徳」には、自己を犠牲にする	された公共的な思考の次元を成立させる。しかし、	ることにある。つまり「共和主義的徳」は私的な関係	極的意義は、個人相互の関係から独立した思考の次元	友愛との対比において「共和主義的徳」という心性が持つ積	とみなしており、「神智学」と較べて友愛を矮小化している。
軽視する	のに、「美	場合、愛	べき幸福	463)° \$	の愛」と	0	について	記者への暴	62) کى°	そのこと	人を、子	対的な恣	いつもそ	· 「ポーザ	によれば多	りることを	徳」には	させる。	我的徳」は	う独立した	「義的徳」	べて友愛を
それ	しく行為	の対象は	の表象へ	仮者の場へ	「美しく		シラーは	力と他者	人類全体	によって	どもを扱う	意さえも	れを鼓吹	侯は自由	くの人が	こ 厭わない	、自己を	しかし、	私的な関	思考の次	という心	を矮小化し
ゆえに、人類	することへ	「表象」で	の熱狂的な	合、人間は	行為するこ		以下にみる	の道具化を	の幸福を目	友人を没落	っように何	押しつけて	しているに	についてあ	ポーザ侯を	、「大胆さ」	犠牲にする	先の引用に	係から区別	元を確保す	性が持つ積	している。

-19-

.

.

•

.

方では「共和主義的徳」が公共的な思考の次元を実現すること	いた世界ではもはやなく、社会の全ての成員が感情や意見に関
を高く評価していたが、他方では以上論じてきた他者への暴力、	しておおむね同じ段階にあるわけではないので、社会の全ての
他者の道具化の問題を自覚していたのである。それゆえシラー	成員が同じ描写のうちに容易に自分自身を認知することはあり
はこの批評の最後の部分において以下のように述べる。「思う	得ないし、同じ感情の中で容易に自分自身に出会うということ
に人間は、道徳的善行に際して、合成された理性的観念よりも	もあり得ない。現在国民(Nation)のエリート(Auswahl)と
むしろ瞬間的で単純な感情によって導かれるように作られてい	大衆(Masse)との間には非常に大きな隔たりが見られる。そ
ますし、またそのように命じられています」 (DK3 464)。	の原因の一部は以下のことに既に存する。すなわち、概念の啓
「ドン・カルロスについての書簡」において「共和主義的徳」	蒙と道徳的な高貴化(sittliche Veredlung)は関連し合う全体
へのシラーの評価はアンビヴァレントであり、彼は感情と理性	をなすのであって、その全体の断片だけでは何も得られないと
的観念との矛盾という問題を抱え込んでいる。	いうことである」(NA22 247f.)。シラーによれば、古代および
	中世の「民衆詩人」と同様の存在を彼の同時代において見出す
四 「ビュルガー批評」における、近代の「民衆詩人」	ことはできない。なぜなら近代ヨーロッパの諸国民には「民衆」
	(Volk)と呼びうるような統一体が存在しないからである。シ
「ドン・カルロスについての書簡」において直面した、感情	ラーによれば、概念的知性における啓蒙を欠いた粗野な下層大
と理性的観念との矛盾という問題に対して、シラーが最初に回	衆と、知性に偏向し感情を考慮しないエリートとの大きな懸隔
答を試みたのは「ビュルガーの詩について」("Über Bürgers	を生じさせた原因の一端は、「概念の啓蒙」が「道徳的な高貴
Gedichte" 1791 以下「ビュルガー批評」と略す)である。その	化」を伴っていないからである。このシラーの見解は「ドン・
際に注目すべきは、この批評の中で提示される近代の「民衆詩	カルロスについての書簡」においてとりあげられた感情と理性
人」の構想である。	的観念との乖離についての問題意識を引き継ぐものである。
まず以下の一節を検討しよう。「ホメロスが彼の時代に民衆	古代・中世におけるのとは異なる近代特有の「民衆詩人」は
詩人(Volksdichter)であったような意味での、あるいは、吟	大衆の趣味に迎合するのではなく、大衆と知的エリートを統合
遊詩人たちが彼らの時代に民衆詩人であったような意味での民	して「民衆」を自ら形成せねばならない、とシラーは論じる。
衆詩人を今日探しても無駄であろう。今日の世界はホメロスが	その際なされるべきは、これまでないがしろにされてきた「道

-20-

理解されるのは、近代の「民衆詩人」はその詩的テクストによ	先の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ、	である。	生々しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならないの	れをいわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的な	別的な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり、そ	かった」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、個	解き放ち、情念を遠ざけて和らげた上で見つめなければならな	自身と疎遠になり、自分が熱狂している対象を自分の個性から	筆を運んだ』とひとが言う詩においてすら、詩人はまず、自分	んでしまう。[…] 『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人の	避的に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち込	べきである。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不可	苦痛を感じながら苦痛を歌うことのないようくれぐれも留意す	はこの「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人は	普遍的な感情を形成することであると規定する。以下の引用で	的なものを普遍的なものに高めること」(NA22 253) によって	である(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地方	る」ことによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在なの	「より純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与え
	他方で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、これ	他方で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、これ先の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ、	他方で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、これ 先の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ、である。	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をる。しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならも	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をる。	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をる。。いわば第三者の観点から眺めなければならない。具な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をしい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない。具な対象に対して現実に感じている感情から距離をとりた」 (NA22 256)。普遍的な感情を形成するために	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をといわば第三者の観点から眺めなければならない。具た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにいた」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにいた」、(NA22 256)。 で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、 の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を る。 で「愛」や「友情」といった個人の快苦の感情を る。 で「愛」や「友情」といった個人の快苦の感情を しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなら る。 で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、 た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためで「愛」や「友情」といった」でA22 256)。普遍的な感情を形成するためにいた」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにいた」でNA22 256)。普遍的な感情をとしい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなられなが、情念を遠ざけて和らげた上で見つめなければたながいかば第三者の観点から眺めなければならをしい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなられている対象に対して現実に感じている対象を自分の個別で、	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、 で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、 で「愛」や「友情」といった個人の快苦の感情を る。 で「愛」や「友情」といった個人の快苦の感情を しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げの引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を いわば第三者の観点から眺めなければならない。具 いわば第三者の観点から眺めなければならない。 しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなら な対象に対して現実に感じている対象を自分の個 運んだ』とひとが言う詩においてすら、詩人はまず で「愛」や「友情」といった個人の快苦の感情を とひとが言う詩においてすら、詩人はまず る。	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば	他方で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、これ である。 である。 である。 である。 である。 で方で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、これ である。 のけたにで個人の快苦の感情を挙げ、	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こ である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 と疎遠になり、自分が熱狂している対象を自分の個性に落ち た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり、 いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的 いわば第三者の観点から眺めなければならない。目 の の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こ である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こ の「高貴化」の内実が具体的に論じたいる対象を自分の個性か と疎遠になり、自分が熱狂している感情を形成するためには、 た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり、 いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的 いわば第三者の観点から眺めなければならない。目 の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ、こ	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こ の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人 自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…』『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…』『この詩では愛、友情等々それ自体が た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり、 いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的 いわば第三者の観点から眺めなければならない。目 のう用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ、こ	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こ で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こ の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。 に詩人の感情を形成することであると規定する。以下の引用 的な感情を形成することであると規定する。以下の引用 的な感情を形成することであると規定する。以下の引用 に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち に読んの感情は理想的な感情を形成するためには、 た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり、 いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的 いわば第三者の観点から眺めなければならない。目 の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ 、こ	で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こ の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ、こ の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ る。 「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こ で「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない いわば第三者の観点から眺めなければならないとすれば、不 である。
らを普遍的なものへと高めることを求めている。このことから		の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を	引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を。	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をる。しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならも	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をる。しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなられいわば第三者の観点から眺めなければならない。具体	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をしい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなられいわば第三者の観点から眺めなければならない。具な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をしい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならせいわば第三者の観点から眺めなければならない。具な対象に対して現実に感じている感情から距離をとりた」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにい	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をな対象に対して現実に感じている感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなられいわば第三者の観点から眺めなければならない。具た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにいた」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにいた」、「なる。	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情をな対象に対して現実に感じている感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなられいわば第三者の観点から眺めなければならない。具た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにいた、「MA22 256)。普遍的な感情を形成するためにいた、「なななり、自分が熱狂している対象を自分の個話	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなられ いわば第三者の観点から眺めなければならない。具た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにい た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためにい た」で見つめなければ な対象に対して現実に感じている対象を自分の個話 で しい感情から、個別性と現実性とを と を たしている対象を自分の個話	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならさ いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体 いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体 しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなられ る。	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばなら いわば第三者の観点から眺めなければならない。具 いわば第三者の観点から眺めなければならない。 に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば	先の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ、 どのしまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち込 解き放ち、情念を遠ざけて和らげた上で見つめなければならないの 自身と疎遠になり、自分が熱狂している対象を自分の個性から 解き放ち、情念を遠ざけて和らげた上で見つめなければならな れをいわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的な れをいわば第三者の観点から眺めなければならない。目分 である。	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人 の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人 の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう、情念を遠ざけて和らげた上で見つめなければなら た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 不 を感じながら苦痛を歌うことであると規定する。以下の引用 的な感情を形成することであると規定する。以下の引用	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人 の「高貴化」の内実が見体的に論で見つめなければなら ないとすれば、 の」の」の方が熱狂している感情から距離をとり、 しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない。 しい。	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。以下の引用 にお人の感情を形成することであると規定する。以下の引用 的な感情を形成することであると規定する。以下の引用 的な感情を形成することであると規定する。以下の引用 の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 の に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち に う。 に引して現実に感じている感情から距離をとり、 いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的 いわば第三者の観点から眺めなければならない。 しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない る。	の引用においてシラーは、一方で個人の快苦の感情を挙げ の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。 (NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地 ものを普遍的なものに高めること」(NA22 253)によっ である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 の内実が具体的に論じられている。 「詩人 の感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない 。 自 い感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない る。
普遍的なものへと高めることを求めている。このことかで「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こことによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在なって「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、こで「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、これの「「愛」や「友情」といった個人の快苦の感情を形成することを求めている。「愛」や「友情」といった個人相互の関係を挙げ、この時では第三者の観点から眺めなければならない。具体的いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的いかば第三者の観点から眺めなければならない。具体的いかが第三者の観点から眺めなければならない。具体的いかが第三者の観点から眺めなければならない。長体的いかが第三者の観点から眺めなければならない。長体的いかが第三者の観点から眺めなければならない。長体的いかば第三者の観点から眺めなければならない。このことかで「愛」や「友情」といった個人の快苦の感情を挙げ、この時でした」で見つめなければならない。長体的なものへと高めることを求めている。このことか	る。 い感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的 いわば第三者の観点から眺めなければならない。 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 るい た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、 な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり、 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 る。 な対象に対して現実に感じている感情を形成するためには、 な対象に対して現実に感じている感情を形成するためには、 なが泉におして現まで見の個性に落ち しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない。 しいる。 なら、 しいでものに論した」で見ののなければならない。 した」 ののでものでものでものでものでものでも ないとすればでした。 ならないにしている。 ならればならない。 ならる。 ならした」 している。 ならればならない。 ならしている。 ならればならない。 ならる。 ならしている。 ならればならない。 ならないに、 ならない。 ならればならない。 ならないでも ならない。 ならればならない。 ならない。 ならない。 ならればならない。 ならない。 ならればならない。 ない。 ならない。 ない。 ならない。 ない。 ならない。 ならない。 ならない。 ない。 ならない。	しい感情から、個別性と現実性とを捨象せねばならない いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的 いわば第三者の観点から眺めなければならない。 しまう。 $[]$ 『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 に詩人の感情を形成することであると規定する。以下の引用 的な感情を形成することであると規定する。以下の引用 の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人 しまう。 $[]$ 『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち に詩人の感情は理想的な音遍性から不完全な個性に落ち にう。 $[]$ 『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。 $[]$ 『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。 $[]$ 『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 に詩人の感情がら、個別性と現実性とを捨象せねばならない の内実が見て知らげた上で見つめなければなら た」(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、 の りが教に対して現実に感じている感情を形成するためには、 た」(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地 に詩人の感情を形成するためには、 た」(NA22 256)。 一〇二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇	いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的いわば第三者の観点から眺めなければならない。具体的な感情を形成することであると規定する。以下の引用的な感情を形成することであると規定する。以下の引用の「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「時人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ちである。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不である。詩人自身が受苦する側でしかないようくれぐれも留意た」(NA22 256)。普遍的な感情を形成するためには、不である。詩人」の内実に感じている感情から距離をとり、 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人しまう。「…」『この詩では愛、友情等々であいた」である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不である。詩人自身が受苦する側でしかないと妻を自分の個性のというがら、「「」の人」の方が見体的に認らればならない。」 の「高貴化」の内実が見体的に論している感情から距離をとり、している。「」」。 の」によってためる。」 の」でした。 の」では、 の」である。 の」では、 の」でする。 の」では、 の」では、 しているがないましている。 で見つめなければならない。 しまう、「」」。 の」では、 の」でした。 の」で見ている。 の」で見ている。 の」で見ている。 の」で見ている。 の」で見ている。 の」で見ている。 の」で見ている。 の」で見ている。 の」でした。 の」でものでした。 の」でものでものでき の」でものでものでもればなら	な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり、 な対象に対して現実に感じている感情から距離をとり、 と疎遠になり、自分が熱狂している対象を自分の個性か と疎遠になり、自分が熱狂している対象を自分の個性 に詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ち である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 である。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不 やまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 しまう。「…」『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人 によって大衆の「情念の浄化」を大衆に「貸し与	めれのま体性れれ ^{る。} 下 ⁽⁾ 人き「 にば個ずがにばも「のに的存貸 はな性、詩落、留詩引よで在し 、らか自人ち不意人用っ地な与	れのま体性れれ ^{る。} 下 ⁽⁾ 人き「 ば個ずがにばも「のに的存貸 な性、詩落、留詩引よで在し らか自人ち不意人用っ地な与	の ま 体 性 れ れ ⁽³⁾ 下) 人 き 「 ()) ()) () ()) ()) ()) ()) ()) ()) ())) ())) ())) ())) ())) ())) ()) ())))	ま 体 性 れ れ る 。 下) 人 き 「 ず 、 ら た に ば も 「 の に ら 存 貸 し 、 で あ に 、 の 市 の に ち の に の ち の に の ち の に の ち の に の ち の た の つ た の た の た の た の た の た の た の た の た の の た の た の の つ た の ろ の の つ し つ ち つ し つ ち つ し つ う の う の ろ の つ の つ し つ つ し つ し つ し つ し つ つ つ し つ つ つ し つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ	まう。[…]『この詩では愛、友情等々それ自体が詩人によって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在ないいA22 248f.)。シラーは「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人の感情を形成することであると規定する。以下の引用な感情を形成することであると規定する。以下の引用のを普遍的なものに高めること」(NA22 253)によってよって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在な続粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与	詩人の感情は理想的な普遍性から不完全な個性に落ちある。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不のを普遍的なものに高めること」(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地とによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在な純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与	ある。詩人自身が受苦する側でしかないとすれば、不感じながら苦痛を歌うことのないようくれぐれも留意のを普遍的なものに高めること」(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地とによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在な純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与	感じながら苦痛を歌うことのないようくれぐれも留意感じながら苦痛を歌うことのないようくれぐれも留意(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地とによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在な純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与	「高貴化」の内実が具体的に論じられている。「詩人な感情を形成することであると規定する。以下の引用のを普遍的なものに高めること」(NA22 253)によっ(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地とによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在な純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与	な感情を形成することであると規定する。以下の引用のを普遍的なものに高めること」(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地とによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在な純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与	的なものを普遍的なものに高めること」(NA22 253)によってである(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地方る」ことによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在なの「より純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与え	である(NA22 248f.)。シラーは「高貴化」を、「個人的で地方る」ことによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在なの「より純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与え	る」ことによって大衆の「情念の浄化」を果たすべき存在なの「より純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与え	「より純粋でより知性に富んだテクスト」を大衆に「貸し与え	

を先取りして代表する存在であり、粗野な情動に支配されていそれに対して近代の「民衆詩人」は、いまだ存在しない「民衆」
の「民衆詩人」は、実際に存在する「民衆」の代表であるが、
と大衆との関係であろう。シラーに従えば、古代あるいは中世
と考えた。ただし、ここで問題となるのは、近代の「民衆詩人」
合し「民衆」と呼び得るような統一体を形成することができる、
ラーは、「民衆詩人」はこのようにして大衆とエリートとを統
利害関心から独立した公共的な次元を確立することである。シ
現実性とを取り除き、それによって感情の領域において私的な
題としたのは、詩のテクストを通じて民衆の感情から個別性と
本節において見たように、シラーが近代の「民衆詩人」の課
を期待する。
学」を「自然の単純な感情へと溶かし込む」(NA22 249)こと
近代の「民衆詩人」に、「生きることについての最も崇高な哲
主義的徳」を感情において補完する機能を果たす。シラー自身、
る。いうなれば「民衆詩人」による「道徳的高貴化」は「共和
することによって公共的な感情の次元を確保すべき存在であ
とするのに対して、近代の「民衆詩人」は普遍的な感情を形成
理念に依拠することによって公共的な思考の次元を確保しよう
対比して言えば、「共和主義的徳」が人類全体という抽象的な
持つ、ということである。第三節で論じた「共和主義的徳」と
確に区別されるような、公共的な感情の次元を確立する使命を
って、個人的な利害関心や特定の個人相互の私的な関係から明

-21 -

•

.

,

.

-22-

実在性を顧慮する判断は美的判断ではないからである。ゆえに
に、実在性の助けをかりて働きかけるものは美的仮象ではなく、
らの強制は実在性による働きかけに他ならず、先に触れたよう
徳的強制によって働きかけることができない。なぜなら、これ
間は、この美的仮象について判定する他者に物理的あるいは道
である。この際自らの振る舞いを美的仮象として他者に示す人
うな人間相互の関係が、「美しい交際」すなわち「美的国家」
間が他者に「単に形態として」(NA20 410)現象する。このよ
る。このような行為によって成立する人間関係においては、人
他者に肯定的に判定される事 (gefallen: NA20 409) を欲求す
自身の振る舞いを美的仮象として他者に示し、その振る舞いが
形することへと向かう。この最後の段階において人間は、自分
から、自己を装飾すること、そして自己の振る舞いを美的に造
美的仮象を求める未開人の欲求は、美しい物を所有すること
る限りその判断は美的判断ではない」(NA20 402)からである。
でなければならない。なぜなら「我々の判断が実在性を顧慮す
りることもない、こ。シラーによれば美的判断の対象は美的仮象
実在すると称しないし、それが作用する上で実在性の助けを借
美的仮象は実在性から厳密に区別された単なる現象であって、
「論理的仮象」(der logische [Schein]) と呼ぶ)とは異なる。
を実在すると見せかける虚偽としての仮象(これをシラーは
(der ästhetische Schein) と呼ぶが、これは、実在しないもの
味する。この際に問題となる「仮象」をシラーは「美的仮象」

る調和との対応関係が、本節冒頭でひいた「全体の意志を個人	へにおける個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係におけ	[Repräsentant der Gattung)」 (NA20 411) である。つまり、個	頖	調和している。シラーによればこのとき人間は「個	と普遍性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil)(ebd.)	わち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [Theil])	的仮象について判断する際には、人間本性の二つの部分、すな	善関心から離れた普遍的な立場で判定する。ゆえに、趣味が美	た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利	旳仮象は個別的な感覚的表象であるが、現実存在とは区別され	趣味の判定する対象が美的仮象であることから説明される。美	趣味が個人の内部および社会において調和をもたらすことは、	趣味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 410)。	巫べる。。。「趣味だけが社会に調和をもたらします。なぜなら	ければならない。その「趣味」についてシラーは以下のように	繊細な法廷」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形しな	よって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味の	自己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強制に	放される。
	る個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えている。	個別性	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えていてにおける個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係におlepräsentant der Gattung)」(NA20 411) である。つまり、	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えてにおける個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係とpräsentant der Gattung)」(NA20 411) である。つまると同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えていてにおける個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係におとpräsentant der Gattung)」(NA20 411)である。つまり、ると同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類の代が調和している。シラーによればこのとき人間は「個人」	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えてると同時に「類(Gattung)」(NA20 411)である。つまな認知している。シラーによればこのとき人間は「個普遍性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil)	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えてると前端の間外での調和をもたらす、とシラーは考えては、人間相互の関係のと同時に「類(Gattung)」(NA20 411)である。つまの「類和している。シラーによればこのとき人間は「個が調和している。シラーによればこのとき人間は「個ち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えてておける個別性と普遍性とでした。シラーによればこのとき人間は「個」な、個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil)であるにおける個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係」における個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係」である。シラーによればこのとき人間は「個」における個別性と普遍性との調和は、人間本性の二つの部分、仮象について判断する際には、人間本性の二つの部分、	る個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えている。 人における個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係におけ あると同時に「類(Gattung)」(NA20 411)である。つまり、個 (Repräsentant der Gattung)」(NA20 411)である。つまり「類の代表 あると同時に「類(Gattung)」(NA20 411)である。つまり、個 (Repräsentant der Gattung)」(NA20 411)である。つまり「類の代表 をが調和している。シラーによればこのとき人間は「個人」で たいる。いて判断する際には、人間本性の二つの部分、すな 害関心から離れた普遍的な立場で判定する。ゆえに、趣味が美	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えてていから離れた普遍性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil)普遍性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) を、個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) を、個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) ると同時に「類(Gattung)」(NA20 411)である。つまり 「類のから離れた普遍的な立場で判定する。ゆえに、趣 している。シラーによればこのとき人間は「個- における個別性と普遍性との調和は、人間本性の二つの部分、 したいの。 のまり、趣味はこの美的仮象について個々-	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて 個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて で象について判断する際には、人間本性の二つの関係」 を、個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) ち、個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) ち、個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) ち、個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) における個別性と普遍性との調和は、人間本性の二つの部分、 している。シラーによればこのとき人間は「個- における個別性と普遍性との調和は、人間本性の二つの部分、 している。シラーによればこのとき人間は「個- における個別性と普遍性との調和は、人間本性の二つの部分、 している。シラーによればこのとき人間は「個- における個別性と普遍性との調和なしている。 のまり 「類ののののの」 (しているのののの)	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて 個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて しなる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- している。シラーによればこのとき人間は「個- なと同時に「類(Gattung)」(NA20 411)である。ゆえに、趣味 はこの美的仮象について個々- している。シラーによればこのとき人間は「個- なと同時に「類(Gattung)」(NA20 411)である。のまり 「類のから離れた普遍的な立場で判定する。ゆえに、趣味 における個別性と普遍性との調和は、人間本性の二つの部分、 における個別性と普遍性との調和はこのとき人間は「個- なと同時に「類(Gattung)」(NA20 411)である。でまり 「類のの部分」(der geistige Theil) であるに、地球 における個別性と普遍性との調和は、人間本性の二つの部分、 とから説明される のまた、 のまた、 のまた、 のまた、 のまた、 のまた、 のまた、 のまた、	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて したから離れた普遍的な立場であるが、現実存在とは区別 している。シラーによればこのとき人間相互の関係に である現象であり、趣味はこの美的仮象について判断する際には、人間本性の二つの部分、 している。シラーによればこのとき人間は「個々 なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々 である方式でのです。 (Gattung)」(NA20 411)である。のえに、趣味 でありている。シラーによればこのとき人間は「個々 なと同時に「類 (Gattung)」である存在、つまり「類の ると同時に「類 (Gattung)」である存在、つまり「類の である方式での部分」(der geistige Theil) であるに、 している。シラーによればこのとき人間は「個々 における個別性と普遍性との調和は、人間本性の二つの部分、 であるであるが、現実存在とは区別 であるに、 している。 のまか」 (して geistige Theil) である。 のまか」 (して geistige Theil)	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて 「味が個人のうちに調和をもたらす、とシラーは考えて における個別性と普遍性と普遍性との調和は、人間相互の関係」 である現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- 単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- 単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- している。シラーによればこのとき人間は「個- など同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類の ると同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類の ると同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類の である。シラーによればこのとき人間は「個- などの における個別性と普遍性との 調和している。シラーによればこのとです」(NA20 における個別性と が調和している。シラーによればこのとでの の部分 、他和 である のでの の の の の の の の の の の の の の	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて 「味い個人のうちに調和をもたらす、とシラーは考えて 「味い間定する対象が美的仮象であるが、現実存在とは区 」 「味い個人のうちに調和を生み出すからです」 (NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」 (NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」 (NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」 (NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」 (NA20 「「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて ていてシラーは考えて 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「したいる。シラーによればこのとき人間は「個- なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- 関心から離れた普遍的な立場で割定する。ゆえに、趣味 している。シラーによればこのとき人間は「個- なる見象であり、趣味はこの美的仮象について個々- における個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) ち、個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) である。かラーによればこのとき人間は「個- なと同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類0 ると同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類0 たいている。シラーによればこのとき人間は「個- なると同時に「類(Gattung)」であるです」(NA20 における個別性と普遍性の調和をもたらすこ	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて 「深る」。「趣味だけが社会に調和をもたらす、とシラーは考えて 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 「味っ判定する対象が美的仮象であることから説明された 「です」である。シラーによればこのとき人間は「個- なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- 単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- 単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- しから離れた普遍的な立場で判定する。ゆえに、趣味 している。シラーによればこのとき人間は「個- ると同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類(ると同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類(ないって判断する際には、人間本性の二つの部分、 における個別性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) 「新和している。シラーによればこのとき人間は「個- における個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係」 (ないてりて判断する際には、人間本性の二つの部分、 においてしたいで個々- である。のまたらします。なび において調和をもたらします。なび においてしたいでしたいでします。 のえに、趣味 においてしたいである。 のえに、 していでしたいでしたいである。 のえに、 していてしまれた 「ないでしたい」 (ないの部分」(ないの部分) (ないの部分) (していてしたいでしたい (ないの部分) (していてしたいで したいで (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ないで) (ない) (た) (ないで) (ないで) (ない) (ないで) (ない) (た) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (ない) (な) (な	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて (NA20 409) に従って自己の振る舞いを造 いる。。「趣味だけが社会に調和をもたらします。な での判定する対象が美的仮象であることから説明され する現象であり、趣味はこの美的仮象についてシラーは以下の なる現象であり、趣味はこの美的仮象について りた、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [1 ち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [1 ち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [1 ち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [1 ち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [1 たるり、趣味だけが社会に調和をもたらします。な (MA20 411) である。ゆえに、趣 (Gattung)」(NA20 411) である。のま (の子) (ないて判断する際には、人間本性の二つの部分、 である現るであり、 していて個々) における個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係」	個別性と普遍性の調和をもたらす、とシラーは考えて (NA20 409)に従って自己の振る舞いを造 ればならない。その「趣味」についてシラーは考えて でか。個人の内部および社会に調和をもたらします。な になる現象であり、趣味だけが社会に調和をもたらします。な にな個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 味ば個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 味ば個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 味が個人の内部および社会において調和をもたらします。な になる現象であり、趣味しこの美的仮象について個々- 単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々- りた。個別性を志向する「「「た」の、 である存在、つまり「類 ると同時に「類(Gattung)」である。ゆえに、趣味 している。シラーによればこのとき人間は「個- ると同時に「類(Gattung)」である存在、つまり「類 のから離れた普遍的な立場で判定する。ゆえに、趣味 していて判断する際には、人間本性の二つの部分」 (der geistige Theil) が調和している。シラーによればこのとき人間は「個- なる現象であり」(Gattung)」である存在、つまり「類 のから離れた普遍的な立場で利定する。のえに、趣味 しついて判断する際には、人間本性の二つの部分 (der geistige Theil) が調和している。シラーによればこのとき人間は「個- なると同時に「類 (Gattung)」である存在、つまり「類 のとのである存在、つまり」 (MA20 411)である。 のまれた である。 のえに、趣味 していてしたらします。 の の の の の の の の の の の の の の の の の の の
このような、個人の内部における調和と人間相互の関係におけ		人における個別性と普遍性との調和は、人間相互の関係におけ	の関係にお	関 つ 「	関 つ 「 「 係 ま 類 個	関 つ 「 「 neil)	関つ「functional states of a state	関 の 「 個 - 「 個 - 「 個 - 「 の ま り の 、 、 約 の 、 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の	関 つ ま り の 、 加 eil) い he [7] の ま り の 、 悪 を 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の の 、 の 、 の 、 の	関 つ 「 個 ー い he [1] い he [1] の 、 し の 、 し の の 、 の の の の の の の の の の の	関 つ 「 個 に い he [] か 他 (」 の し の の の の の の の の の の の の の の の の の	関つ「「meil」 「個 は され の の 気 類 個 し こ れ こ の し 、 個 は され こ の の 、 個 し こ れ の の の し い か 。 で の の し の の の し の の の の の の の の の の の の の	関 つ 「 「 個 は さ れ こ 「 個 は さ れ こ す こ	関つ「「meil) 開て「個はされ」 A20	関つ「「meil) 「個 は さっす A 20 の す の な が 他 に れ れ こ な ぶ	関つ「「neil) 「個 は さっ A 。 下 の 市 い h 部 、 個 は さっ A 20 本 の 、 で の	関つ「「neil) 留 が 他 は さ ち A の 下 を 造 い の し こ の 、 置 し 、 個 は さ ち ろ の で を 造	関つ「「neil) în 部 、個はさら A 。下を、 係 ま 類 個 / 分 趣 々 区 れ こ の 造 「	関つ「「neil) in
「新たいの人間相互の関係」 「「「「「」」」」」 「「」」」 「「」」」 「「」」」 「「」」」 「「」」」 「」」 」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 」 」 」 「」」 」 」 「」」 「」」 」 」 」 「」」 」 」 」 」 「」」 」 」 」 」 「」」 」 」 」 」 「」」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」 」	つ「「neil) în în li さら A ° 下を、は ま類個 ⑦ 趣々区れこの造「、	「「function in the state of th	とが調和している。シラーによればこのとき人間は「個人」で とが調和している。シラーによればこのとき人間は「個人」で とが調和している。シラーによればこのとき人間は「個人」で た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について超味が個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形しな 地味が個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 410)。 趣味が個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 410)。 趣味が個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 410)。 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象である「精神的部分」(der geistige Theil)(ebd.) とが調和している。シラーによればこのとき人間は「個人」で	と普遍性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) (ebd.) と普遍性を志向する「精神的部分」(der geistige Theil) (ebd.) と普遍性を志向する「精神的部分」(der sinnliche [Theil]) わち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [Theil]) た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 た単なる現象であるが、現実存在とは区別され のの部分、すな ののが、見いてもたらします。なぜなら なぜなら ない。その「悪味」についてシラーは以下のように 、趣味が していためにしたいでします。なぜなら なぜなら ない。その「本は ののである」 (NA20 410)。 を の のの に い て し の の の の の の の の の の の の の の の の の の	自己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強制に なって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味の り仮象について判断する際には、人間本性の二つの部分、すな がなれる。。 「趣味だけが社会に調和をもたらします。なぜなら むべる。。 「趣味だけが社会に調和をもたらします。なぜなら むべる。。 「趣味だけが社会に調和をもたらします。なぜなら た単なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人の利 的仮象について判断する際には、人間本性の二つの部分、すな わち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [Theil]) わち、個別性を志向する「感性的部分」(der sinnliche [Theil])	的仮象について判断する際には、人間本性の二つの部分、すな 自己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強制に 放される。	害関心から離れた普遍的な立場で判定する。ゆえに、趣味が美趣味が個人の内部および社会に調和をもたらします。なぜならければならない。その「趣味」についてシラーは以下のようにはべる。。「趣味だけが社会に調和をもたらします。なぜならければならない。その「趣味」についてシラーは以下のようには、趣味の判定する対象が美的仮象であるが、現実存在とは区別された単なる現象であり、趣味はこの美的伝象にあいて調和をもたらします。なぜならがで、個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 410)。 趣味の判定する対象が美的仮象であることから説明される。美趣味の判定する対象が美的仮象である、現実存在とは区別され がざれる。	なる現象であり、趣味はこの美的仮象について個々人象は個別的な感覚的表象であるが、現実存在とは区別の判定する対象が美的仮象であるが、現実存在とは区別な法廷」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形て他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強れる。	象は個別的な感覚的表象であるが、現実存在とは区別の判定する対象が美的仮象であることから説明される『『趣味だけが社会において調和をもたらすこ」な法廷」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形て他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強れる。	趣味の判定する対象が美的仮象であることから説明される。美趣味が個人の内部および社会において調和をもたらすことは、繊細な法廷」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形しな様細な法廷」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形しなよって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味のように同己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強制に放される。	趣味が個人の内部および社会において調和をもたらすことは、 趣味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 410)。 述べる…。「趣味だけが社会に調和をもたらします。なぜなら はればならない。その「趣味」についてシラーは以下のように 様細な法廷」(NA20 409) に従って自己の振る舞いを造形しな よって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味の よって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味の なざれる。	趣味は個人のうちに調和を生み出すからです」(NA20 410)。述べる…。「趣味だけが社会に調和をもたらします。なぜならはればならない。その「趣味」についてシラーは以下のように繊細な法廷」(NA20 409) に従って自己の振る舞いを造形しなよって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味の自己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強制に放される。	述べる…。「趣味だけが社会に調和をもたらします。なぜならければならない。その「趣味」についてシラーは以下のように繊細な法廷」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形しなよって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味の自己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強制に放される。	ければならない。その「趣味」についてシラーは以下のように繊細な法廷」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形しなよって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味の自己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強制に放される。	繊細な法廷」(NA20 409)に従って自己の振る舞いを造形しなよって他者から肯定的な判断を獲得するのではなく、「趣味の自己の振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強制に放される。	趣 強 味 制	振る舞いを美的仮象として他者に示す人間は、強。	放される。	

-23 -

•

.

•

•

-24 -

するまで「社会の紐帯」を維持する役割を担っている(NA21人間が道徳的陶冶を達成し道徳法則に基づいて社会関係を構築
ないとされる。しかし、趣味による人間の行為の規制は、将来
(Moralität)には寄与せず、「適法性」自体は道徳的価値を持た
は 振る 舞いの 「 適法性」 (Legalität) に は 寄与する が 「 道徳性」
den moralischen Nutzen ästhetischer Sitten" 1796)では、趣味
の後に書かれた「美的風習の道徳的効用について」("Ueber
的価値と道徳的価値を厳密に区別している。「美的教育書簡」
断力批判』研究以降の「美的国家」論は、これとは対照的に美
しい行為」は道徳的に卓越した行為に他ならなかったが、『判
前に書かれた「ドン・カルロスについての書簡」において「美
第三節との関連において付言すると、『判断力批判』研究以
能を引き出すか、という問いへの答えであると言える。言。
しようとするときに、いかにして美的なものから社会統合の機
道徳性による社会統合がかなわない段階で力による支配を解体
この構想に照らして「美的国家」論を見ると、これは、未
312) という命題に凝縮される。
の構想は、「人が自由へと至るのは美を通じてである」(NA20
的なものを代行しかつ補助するという構想を提示している。こ
る (NA20 332f.)。つまりシラーは、美的なものによって道徳
挙げ、「芸術」が「政治における改善」の「道具」であるとす
するものを要請する。言。シラーはその支えとして美的なものを
代わりに社会秩序を維持し、なおかつこの道徳性の成長を補助

れらが調和する可能性を探求したのである「500	て「美的国家」論は、個別性と普遍性を明確に区別しつつ、そ	個別性と普遍性を相容れないものとして対置した。これに対し	を消去しようと試み、第三節でみた「共和主義的徳」の議論は、	いる。第二節でみた「愛」の思想は、個別性と普遍性との差異	と普遍性との調和的な媒介をもたらす、という議論を展開して	断の能力を行使し、個人および人間相互の関係において個別性	は、個人が自己の美的な欲求を追求して趣味という普遍的な判	的国家」論は最も深化した段階であると言える。ここでシラー	社会統合の問題に関するシラーの思想的展開のうちで、「美	六 結 語	割しか持たないが、しかしそれは不可欠な役割である回。	改革に先立つ段階において社会統合を果たすという暫定的な役	36)。シラーにとって「美的国家」は、確かに国家の道徳的な
-------------------------	------------------------------	------------------------------	-------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	-----------------------------	-------	----------------------------	------------------------------	-------------------------------

-25-

という言葉に置き換えることがある。

次節以降の議論との関係上、本稿においてはこの「愛」を「友愛」ことからも理解されるように、友情を含むような広義の愛情である。
(2)「神智学」における「愛」は、それが「好意」を換言した語である
する研究は管見の限りでは見つかっていない。があるが、この社会統合という観点からシラーの思想の展開を通覧
るもの」(『理想』 第六五六号 理想社 一九九五年 二七―三八頁) 小田部胤久「美学と国家論の交わるところ―〈美的国家〉の意味す
Kunst: Eine systemtheoretische Untersuchung zu Schillers Briefen "Über die ästhetische Erziehung des Menschen". Opladen 1987. ねみど
て解釈する先行研究としては、Disselbeck, Klaus: Geschmack undを意味しない。シラーの「美的国家」を社会統合という問題に即し
に先だって「社会」が既に存在しそれに後から個人が参入することに先だって「社会」が既に存在しそれに後から個人が参入すること
固本生が普遍生へと某介されることを表す。この長見ま、「充合」(1) 本稿において「社会統合」という表現は、人間相互の関係において
註
石原達二訳『美学芸術論集』冨山房百科文庫 一九七三年 「美的教育書簡」については以下の邦訳を参照した。
シラーによる強調は、訳文では傍点で示し、原文では斜体で示す。また、引用文および引用語句における []は引用者による補足を示す。
a.M. 1989.
Hrsg. von Gerhart Kluge. (Bibliothek Deutscher Klassiker 49) Frankfurt
Hrsg. von Herbert Meyer. Weimar 1958. [DK3] <i>Friedrich Schiller. Werke und Briefe</i> . Bd. 3. Dramen II. (Don Karlos)
[NA22] Schillers Werke. Nationalausgabe. Bd. 22. (Vermischte Schriften)
sophische Schriften) Hrsg. von Benno von Wiese. Weimar 1962-63.
[NA20, NA21] Schillers Werke. Nationalausgabe. Bd. 20, 21. (Philo-
略号のあとの数字によって頁数を示す。
本稿において引用するシラーの著作は以下の〔〕内の略号によって表し、

この第一の説明に関してシラーが後にいかなる立場をとったかとい うな変化はいかなる意義を有しているのだろうか。道徳法則は「共 めに、愛は相手のために偉大に行為します」(DK3 1351)。このよ る。「徳は法則のために偉大に行為します。狂信は自分の理想のた (DK3 463)。この箇所が一七九二年には以下のように書き換えられ ですが、善良な人間が美しく行為するのは、相手のためです 節がある。「偉大な人間が美しく行為するのは、道徳的な美のため なっている。一例を挙げると、一七八八年の版には以下のような一 研究を経た結果、道徳法則のための行為が新たに考慮されるように 記述と一七九二年の記述を比べると、一七九二年の時点ではカント れた修正を検討することによって知ることができる。一七八八年の うことは、この「ドン・カルロスについての書簡」が一七九二年に う抽象的観念」の実現を目指す)と一致することは明白である。 非難されている「完全性の原理」(これは「世界全体の完全性とい とは異なった性格を持っている。 の国家を超越するポーザ侯のコスモポリタン的な「共和主義的徳 くまでも祖国愛であるという点において、人類全体を対象とし個別 の原理と規定される「政治的徳」(la vertu politique)は、それがあ ろう(DK3 461)と述べている。しかし、『法の精神』で共和政体 を読んで知っている見解」が『ドン・カルロス』の中で「適用され 身が認めている。シラーは、「素直な観察者」は「モンテスキュー ポーザ侯の「共和主義的徳」がモンテスキューの『法の精神』() スの功利主義』法政大学出版局 一九九三年を参照。 シラーが 主義的徳」が、本稿冒頭に引いた「優美と尊厳について」の一節で て肯定されている」ことを見て「不快ならざる驚き」を感じるであ 七四八)における共和政体論に由来する概念であることはシラー自 スの思想について詳しくは、森村敏己『名誉と快楽 功利主義的倫理思想である。フランス唯物論の代表者エルヴェシウ 想において人間の行為の原理を感覚上の快不快に還元しようとした 「小散文集」(Kleine prosaische Schriften)に収録された際に加えら また、人類全体という表象を何よりも優先するポーザ侯の「共和 「唯物論」という言葉で指しているのは、フランス啓蒙思 エルヴェシウ

26 -

5

NII-Electronic Library Service

4

3

法は、 別される。ゆえに、シラーがカントの倫理学を受容した結果、個別 他者の道具化を規制する歯止めを持たない「共和主義的徳」とは区 としても扱うことを要求しており、その点において他者への暴力や であるけれども、『道徳形而上学原論』(一七八五)における定言命 和主義的徳」と同様に特定の対象への関心から独立した行為の原 判されるべき事柄ではなくなったと言える の対象から独立した道徳法則が行為の原理であることそれ自体は 他者の人格における人間性を手段としてのみならず常に目的

化させたことを意味している。この点には第五節において触れる。 批判』研究を経てシラーが人間存在の「美」についての考え方を変 愛」(DK3 1351) という表現に代えられている。これは、『判断力 を消していることも顕著な特徴である。例えば本稿で取りあげた 「美しい行為への愛」という表現は一七九二年の時点で「理想への また、一七九二年の版においては行為の「美」に関わる語彙が姿

- $\widehat{6}$ このような批判の一例として以下を参照。Berghahn, Klaus L.: Hermand. Frankfurt a.M. 1974. S. 51-75. Wisconsin Workshop) Hrsg. von Reinhold Grimm und Jos Kulturkonzept Schillers." In: Popularität und Trivialität. (Forth "Volkstümlichkeit ohne Volk? Kritische Uberlegungen zu einem
- $\widehat{\underline{7}}$ る。 美的仮象が実在性の助けを借りることなく働きかける、ということ 間相互の関係を空間的に表現するという同一の機能を果たしてい 後述するように「美的国家」が「美しい交際の領域」と換言されて いことが理解されよう。「美的国家」論において「国家」(Staat) いることからも、ここでの「国家」が字義どおりの国家を意味しな 「国」(Reich)「領域」(Kreis)といった言葉は交換可能であり、人
- 9 象としての価値とは関係しないということを意味する。 すものの表象であっても、道徳的ないし物質的価値は美的仮象の仮 は、仮に美的仮象が道徳的に優れたものないし物質的な欲求を満た

8

Geschmacks." Die Kategorie des Geschmacks in der Asthetik Schillers として以下を参照。Amann, Wilhelm: "Die stille Arbeit des 十八世紀の趣味論の伝統とシラーの趣味概念との関係を論じた研究

は、 趣味が他者との交際における振る舞いに適用される際の機能につ ちないもの、硬いもの、暴力的なものはいかなるものも嫌う。 断能力としての趣味や、「良き作法」による感情の制御という主題 jedem civilisirten Menschen)に他ならない」 (NA21 31)。社会的判 文明化された人間の美的な規則(ein aesthetisches Gesetz, von gute Ton)が要求することである。そしてこの良き作法はあらゆる 規則を課すること、このことは周知のようにすでに良き作法(der む。我々が感情の嵐の中でも理性の声を聞き、自然の粗野な爆発に て軽やかにまた調和的に組み合わされるものはいかなるものも好 における以下の記述を参照。「趣味は抑制と礼節とを要求し、 ては、「美的風習の道徳的効用について」(本文の後の箇所で触 ち入った検討は二〇〇一年の第十五回国際美学会議での報告 等の理想」(NA20 412)を実現するとされている(なおこの点 会の階層秩序を「美的国家」に受け入れない。階層秩序による強制 廷が成立せず、ドイツ市民階層は宮廷に由来する「文明」を外面的 把にまとめると、政治的に分裂状態にあったドイツでは大規模な宮 宮廷社会に由来する。確かに、『文明化の過程』の議論をごく大雑 自身が「美しい作法は玉座の近くで最も早く最も完全に成熟する」 である。「美的国家」における「美しい交際」の構想も――シラー 交術の成立に即して論じた、情動の抑制による「文明化 局 は「美しい交際」から排除されるべきであり、趣味の普遍性は「平 保持したと指摘している(邦訳一七六頁)。ただしシラーは宮廷社 ついて、これがドイツでは例外的に、「平静さ、情動の抑制、落ち 法政大学出版局 一九八一年)でエリアスはヴァイマル古典主義に な虚礼として批判しこれに内面的な道徳性としての「文化 着きと思慮深さ」といった宮廷的性格を少なくとも「理想」として (Kultur) を対置したということになるが、『宮廷社会』(波田他訳 (NA20 412) ことを示唆しているように――十八世紀ヨーロッパの (Zivilisation) という長期的な歴史的過程のなかで理解されるべき 上巻一九七七年、下巻一九七八年)で礼儀作法の変遷と宮廷社 エリアスが『文明化の過程』(赤井・波田他訳 法政大学出版 れる そし ぎこ の立 27

 $\widehat{10}$

und in den Debatten der Aufklärung. Würzburg 1999

「美的国家」の形成という構想が出現したのは、シラーが、「真の道

「(を I 「邦 、巻	(14) ガたてりみのいつ的適理 ダめ人はな利てい陶切り マレ思しま是てめで回	(13 シラ	〔12 〕 この ゆゝ	 (1) このn このの このの この この
	マーは『真理と方法』(轡田・麻生他訳 法政大学出版局最初に現れるときには』単に命令的に、そして感性が人間に課している束縛だけを感じて、理性が人間は理性が人間に課している束縛だけを感じて、理性が人間は理性が人間に課している東縛だけを感じて、理性が人間にない。「倫理的国家」で強制が生じるのは、その成員が道国家」を強制による関係として描くことの間に矛盾を見るの	──「道徳的国家」を国家改せ	この国家論においてシラーは――「美的国家」論におけるのとは異「倫理的国家」と混同してはならない。ゆえに「自然国家」や「道徳的国家」を前述の「動力学的国家」や	(Tanaka, Hitoshi: "Das Motiv der sozialen Integration in Schillers Idee des 'ästhetischen Staates'.")で試みた)。エリアスの枠組みに 従えば、宮廷的社交における感情の制御を支持しつつ身分制度によ る階層秩序を排除する「美的国家」論は、宮廷的伝統を改良して 「真正の文明化」を追求する穏健な宮廷批判(『文明化の過程』邦訳 上巻 一一三―一三五頁)に連なると言える。シラーの戯曲および 「美学的著作と宮廷社交術との関係については以下の論考を参照。 Borchmeyer, Dieter: "'Der ganze Mensch ist wie ein versiegelter Brief'—Schillers Kritik und Apologie der 'Hofkunst'." In: <i>Schiller</i> <i>und die höfsche Welt</i> . Hrsg. von Achim Aurnhammer. Tübingen 1990. S.461-475.

れるのか、という問題についての議論は、本稿の範囲を超える。 果たされたのち、道徳法則に基づいた国家改革はいかにして実現さ 討は別の機会に行いたい。また、「美的国家」において社会統合が シラーは、「事実としては、美しい仮象の国はせいぜい […] いく 人々を包括するものへと拡張されうるのかという問題についての検 つかの選び抜かれたサークルにおいてしか見出されないでしょう_ 家」から「道徳的国家」への移行における不可欠の一段階をなす。 論において、「美的国家」を通じて実現される社会統合は、「自然国 構想に反せずむしろこの構想の一部をなすことを示す。シラーの理 これに対して本稿は、「美的国家」論が「芸術による教育」という 執筆の過程で「芸術への教育」へと変質してしまったと主張する。 とく、「芸術による教育」という「美的教育書簡」の当初の構想は 言われる。「美と芸術は現実に対して束の間の美化する弱光のみを 放棄した結果である。ゆえに「美的国家」については以下のように (NA20 412) と述べるが、「美的国家」はいかにしてより多くの 貸し与える」(邦訳一一八頁)。これを理由にガダマーは、周知のご 徳的で政治的な自由」を芸術によって準備するという元来の構想を

<u>15</u>

における口頭発表に加筆訂正を行ったものである。 本稿は二〇〇一年度の第五十二回美学会全国大会(於早稲田大学)

28